価値概念について（二）

――その内容と意義――

山本二三丸

まえがき
一、価値の通俗的意味
二、イギリス古典学派の価値概念
(1) 経済法則のとらえ方
(2) 商品価値の解釈
(3) 古典学派価値概念の特徴と問題点
(イ)その特徴
(ロ)その問題点
三、マルクスによる科学的価値概念の確立
(1) 科学的経済学の基本的視点
(2) 社会存続の根本条件としての人間的労働
(3) 労働の二面性の把握……（以上、本誌第四〇巻三号所載）
(4) 商品の法則――労働の物化と自立化
(5) 価値概念の骨格

(イ)価値の実体と価値
(ロ)価値規定
(ハ)価値の人間支配……（以上、本号所載）
(6)　価値の結晶としての貨幣の全能……（以下、次号掲載予定）
(7)　価格形態の特質
(8)　労働力の商品化と剰余価値
(9)　資本の全一的支配と人間社会の変質
(10)　擬制的「価値」による強力的収奪
四、価値概念の欠如した「経済理論」の反科学性と階級性
五　資本主義社会における価値生産の客観的意義
六　人間および人間社会にとっての人間的労働の一般的絶対的意義
七　社会主義社会における価値生産の全面的廃棄
簡単な要約
あとがき

三　マルクスによる科学的価値概念の確立（つづき）

(4)　商品の法則――労働の物化と自立化

(一)

ひとはよく「マルクス経済学の理論体系は価値から始まっている」と言いますが、これは、私たちが注意しなければならない見方です。『資本論』第一巻第一篇第一章にとりかかって、私たちがいちばん悩まされるのは、価値についての叙述ですし、ふつうの考え方ではなかなか理解できないむずかしい表現がつぎつぎに出てくるのは、もっぱら

価値を中心としたものですから、どうしても価値に目を奪われて、『資本論』の体系的叙述は価値を出発点としているというように受けとりがちです。しかし、そういう考え方は、やはり正しくないものといわなければなりません。なぜ、正しくないと言うのでしょうか?。

それは、『資本論』がその理論体系の端緒としているのは、価値ではなくて、商品であるからです。第一巻第一篇第一章は、ほかでもなく、「商品」と題されています。そして、なぜ資本主義社会の経済諸法則の体系的展開は商品から始められなければならないかということも、第一章の冒頭の有名なパラグラフで説明されています。そしてまた、価値はそれとして独立したものではなくあくまでも商品の価値であって、商品のひとつの「要因」にほかならないものだということも、はっきりと念頭においておかなければなりません。マルクスはよく、経済学が取り扱うのは経済的形態であると述べていますが、この経済的形態とは、人間の外部にあって人間に対立して独立の存在をたもっていて、しかも人間の意識すると否とにかかわりなく、それ独自の、むしろ人間を支配するまでの社会的性質をもった経済学的範疇を指して言ったものです。そこにある「形態」とは、資本主義社会で支配している人間の生産関係によって必然的に規定されてそのものが社会的にもたされている特別の社会的性質を、つまり社会的な形態規定を簡潔に表現している言葉なのです。ですから、資本主義社会を分析・解明する経済学、つまり経済理論体系は、すべてこうした資本主義社会に独自の経済的諸形態をあらわす諸範疇を、そのもっとも簡単で、またもっとも抽象的なものから始めて、しだいに規定を加えてより複雑なものへと、論理必然的に展開していくものですし、またそれでなければ、真に科学の名に値する理論体系とはとうてい言われるものではないのです。資本主義社会にかんする経済理論体系のうちで、その端緒に据えられる経済的形態、つまり範疇は、ほかでもなく、まさしく商品そのものなのです。

では、どうして、商品という経済的形態、つまり経済学的範疇が、理論体系の端緒に置かれているのでしょうか？それは、資本主義社会を組み立てている生産諸関係のうちでもっとも基礎的な、そして基本となっている生産関係、つまり生産手段の私的所有という生産関係に結びついた法則、その生産関係によって必ず規定されて貫徹しなければならないことになっている、もっとも基本的な経済法則が、すなわち商品の法則であるからです。商品の法則とは、ていねいに言いあらわしますと、生産手段の私的所有という生産関係の支配しているところでは、労働生産物は必ず商品という特別の社会的形態をとったものにならなければならないし、また、労働生産物が商品という特別の形態をとるものとなることによって、その生産関係のもとにある人間社会ははじめて存続することができる、ということになります。この説明は、いくらやさしいと言っても、そのなかには、ふつうの常識ではとうていはっきりとつかめない言葉や文句がふくまれていますので、やはり、それらについて必要と思われる説明を付け加えさせていただかなければなりません。

まず最初にはっきりさせておかなければならないのは、生産手段の私的所有という言葉の意味内容です。どんな人間社会でも、それが無事に存続してゆくことができるためには生存に必要な物資がなければなりませんし、それらの物資は、そのほとんどすべてが人間自身の労働によってつくりだされたもの、つまり労働生産物です。しかし、人間は、自分の労働力を支出しただけではなにもつくれませんし、そのためには、道具、原材料（労働対象をふくめて）、あるいは土地といったような生産のための手段が必要です。必要な労働生産物がいろいろあるように、それらを生産するに必要な生産手段もいろいろちがったものが数多くあります。ところでどんな人間社会でも、人間は孤立して自分独りで必要物資をすべて生産して自給自足の生活を支えるなどということはできるものではありません。人間社会

の最初に見出される原始共産社会（原始共同体や家長制大家族など）では、すべての生産手段は社会全体の共同的所有となっていて、必要生産物をつくるためのいろいろの労働種類、たとえば、狩猟、漁撈、農耕、牧畜、紡織、等々は、それぞれ適当に各成員に割り当てられ、そのために必要な生産手段も、それに応じて計画的に配分されて、文字どおりの社会的分業が社会的・計画的に行なわれることになっていました。そこでは、生産物はすべて社会全体の取得するところですし、それの各成員への分配も、それぞれ必要に応じて社会的に直接に行なわれていたものです。

ところが、右のような原始的な共同社会が崩れて、それまで成員すべてをかたく結びつけていた絆が解消してしまい、各成員は、お互いに結びつきのない、対等の独立した人間として、必要な生産手段の一部分を――というのは、必要な生産手段の全部を成員個人が所有するということはありえないからです――自分ひとりで私的に所有して必要生産物の大半もしくは一部分を自分だけの私的計算で、自分ひとりの労働によって生産するというようになりますと、つまり、生産手段が私的に所有されて私的労働による私的生産が行なわれるようになりますと、そこに重大な経済的変化が生じることになります。

私たちは、さきにこの小論の「二　イギリス古典学派の価値概念」のうちの「(2)　商品価値の解釈」のなかで、エンゲルスが「『資本論』第三部への補遺」として書いた論稿『価値法則と利潤率』のなかから、中世から一九世紀の初めまでのドイツの農村での農民と手工業者との生産物交換についての叙述を引用しました（本誌第四〇巻三号、一一三―一一四ページ参照）が、そこに出てくる農民と手工業者は、いずれも必要物資の大半は自分の所有する生産手段と自分自身の労働とによってつくりだして自家消費にあてていたものです。ただ、農民がその生産した小麦を鍛冶屋の生産した農具と交換するというときに、その互いに私的に交換する生産物にかぎって、両者は相互に独立・対等の

私的生産者であり私的所有者であって、そのかぎりで交換される小麦と農具とは商品という社会的形態をもつものとなっていたわけです。

ところが、社会が歴史的に発展をとげて資本主義社会になりますと、自分の必要とする物資の大半を自分個人で生産して自給自足することのできるひとはほとんどなくなり、しかも、その私的に所有する生産手段で生産する生産物も一つか二つの種類に限られ、したがって、その私的生産物はその全部かまたは大半を商品として交換に出し、それによって自分の必要とする物資を、それとひきかえに手に入れなければならないというようになってきました。要するに、生産手段が各成員の私的に所有するところとなり、それと結びついて社会的分業が発達してきますと、各成員の労働生産物は、必ず商品として私的に交換されなければならなくなるのです。(2)

(2)　なぜ商品になるかというその根拠について、「それは、生産手段の私的所有と自然発生的な社会的分業という、二つの生産関係があるためだ」と説明する向きがありますが、このように私的所有と社会的分業とを切り離しておいてあとから結びつけて商品形態の根拠にするのは、やはり適当でないように思われます。なぜならば、およそ社会的分業の存在していない社会はひとつもなく、人間社会にはいつでも社会的分業が行なわれているからですし、社会の存続を支える多くの必要生産手段を一手に所有するという私的所有はありえないものだからですし、私的所有といえば、それは、いつでも、社会的分業の一環に結びついた一部の生産手段だけを私的に所有することにほかならないからです。ただし、このような私的所有にもとづいた社会では、社会的分業は、共同的所有の社会でのように社会的計画的な分業はとうてい不可能ですので、そこでの社会的分業は、いつでも必ず無政府的で無計画なものにならざるをえないのです。ですから、私たちが商品形態の根拠として「生産手段の私的所有」という言葉を挙げるときには、その中には私的所有と必ず結びついた自然発生的な社会的分業をも当然含んだものとして、その言葉を用いているのだということをわきまえていなければならないのです。

「生産手段の私的所有という生産関係のもとでは、労働生産物は必ず商品として私的に交換されるものにならなけ

ればならない」――これが、この(4)の表題の「商品の法則」という言葉の簡単な意味です。しかし、ここの「商品」という文字だけではなく、やはり「法則」という文字についても、その内容ははっきりとらえておくことが大切です。

経済理論とは、経済法則を明らかにしたものを言います。その法則とは、客観的な、人間の意識するとしないとにかかわりなく、また人間の意志いかんにかかわりなく、鉄の必然性をもってつらぬくもので、さきに見たイギリス古典学派やそれをうのみにしたわが国の似而非「マルクス経済学者」たちがいつも吹聴しているような「原理」などとはまったくちがったものです。「私的所有という生産関係の支配している社会では、その生産関係に規定されて労働生産物は必ず商品という社会的形態のもの、つづめて商品に成らなければならないし、またそれが商品となることによってはじめてその生産関係のもとにある人間社会が存続し発展することができるものとなる」――これが、商品の法則という言葉の内容をわかりやすく言いあらわしたものです。

さらに、いまひとつ、なぜ商品の法則が、資本主義社会の経済諸法則を体系的に解明している科学的な経済学でその端緒として解明されなければならないものとなるかということは、さきにこの「三」の「(1) 科学的経済学の基本的視点」のなかでくりかえし説明されたところですが、その根拠は、またつぎの点を考えにいれることで、もっとはっきりすると思います。

マルクスは、『資本論』の「前著」ともいえる労作、『経済学批判』の「序言」のなかで、私が、右の「三」の「(1)」で曲りなりにも紹介しました「唯物史観」についてその定式ともいわれる精確な叙述を与えていますが、この労作に先さ立って、それへの手引きとして「経済学批判への『序説』」といわれる未完の遺稿を書いています。この『序

説』のうちの「3　経済学の方法」と題された節は、「与えられた一国を経済学的に考察する場合」の方法＝順序を究明しているものですが、その中には、論究のしめくくりとして、つぎのような叙述がおかれています。

「資本はブルジョア社会のいっさいを支配する経済力である。資本が出発点にも終点にもならなければならない。そして、土地所有よりもさきに展開されなければならない。資本と土地所有とが別々に考察されてから、両者の相互関係が考察されなければならない。

それだから、経済学的諸範疇を、それらが歴史的に規定的範疇だった順序にしたがって配列することは、実行もできないし、まちがいでもあろう。むしろ、諸範疇の順序は、それらが近代ブルジョア社会で互いにもっている関係によって規定されているのであって、この関係は、諸範疇の自然的順序として現われるものや歴史的発展の順序に対応するものとは、まさに逆である。ここで問題にされるものは、経済的諸関係がいろいろな社会形態の継起のなかで歴史的に占める関係ではない。まして、「観念のなかでの」（プルードン）（歴史的運動のぼやけた表象のなかでの）経済的諸関係の順序などではなおさらない。問題は、近代ブルジョア社会のなかでのこれら諸関係の編制なのである」（マルクス＝エンゲルス全集、第一三巻、邦訳大月版、六三四―六三五ページ、傍点―山本）。

読者諸君にとくに注意して読んでいただきたいのは、私が傍点をつけたところです。といいますのは、マルクス『資本論』を熱心に研究していられる経済学者のなかには、このはじめの傍点をつけた個所をそのまま『資本論』の叙述の順序を指示しているものと判断して、およそつぎのような説明をされる向きがあるからです。それは、つまり、『資本論』の叙述は「資本を出発点とも終点ともしている」ものであって、その冒頭にある「商品」は、「資本としての商品」、つまり、「資本をあらわしている商品」であり、「資本主義的商品」でなければならないのである、と

いうものです。この考え方は、右のマルクスの叙述を念頭において導き出されたものかと思われますが、しかし、『序説』の読み方にしても、『資本論』の叙述の理解の仕方にしても、やはり問題があるように考えられます。

まず、マルクスが資本が「出発点にも終点にもならなければならない」と言ったのは、その前に明記されているように、「資本が資本主義社会のいっさいを支配する経済力である」からですし、その他の、資本主義以前から存在してきた経済学的諸範疇――たとえば、土地所有とか、高利貸資本、商人資本とかいったようなもの――は、ひとつ残らず資本――正確には産業資本がその基本です――によって規定されたもの、資本によってその内容が以前とちがったものに変容させられたものとなっているからです。ですから、資本について十分精確な解明が行なわれたのちに、はじめてこれらの諸範疇の本質、その意味内容が十分に説明されうるものとなりますし、したがってまた、当然にそのあとでそれらは説明されなければならないという順序になるわけです。『資本論』という世紀的大著作がなぜ『資本 Das Kapital』という表題をつけられているかということの理由も、また、資本――厳密には、産業資本――以外の上記のいわば前期的ともいうべき経済学的諸範疇が、資本についての余すところのない解明のあとで、まさに資本解明にもとづいて、はじめて――最後の第三巻で――究明されるという順序になっているということの根拠も、すべて、右のマルクスの叙述を丹念に読むことによって、理解されてくるところだと、私は考えています。

しかし、『資本論』でその「いっさいを規定する資本」を、その冒頭ですぐさまとりあげて究明することが、いったい、どうして、できるでしょうか？

資本は、誰でもよく知っているように、ある一定額の貨幣、たとえば一千万円という価値額の貨幣であって、しかもそれが自己増殖して、たとえば二百万円という利潤――厳密には、剰余価値――を生みだすものです。つまり、簡

単にいえば、剰余価値を生みだす貨幣です。これは、論理的に厳密にいいあらわしますと、資本は、「剰余価値を生み出す」という規定をもった貨幣である、ということです。ですから、私たちは、資本の本質を正確に把握するためには、まずもって、そのような規定をとりのぞいて、ただの、なんら特別の規定をもたない貨幣について、その本質を十分に究明しておかなければならないのは、理の当然です。貨幣とはどういうものかという、その本質が解明されないで、どうして、それが「剰余価値を生み出す」という特別の規定をもったものに、やさしくいえば、「剰余価値を生み出す」ことができるものに、成るか、つまり、どうして貨幣が資本となるかということが、把握されえましょうか？　「剰余価値を生み出す」ことの意味内容が把握されえないということは、つまるところ、資本をとりあげながら資本の本質は皆目わからないということです。ですから、資本の本質の究明に先だって、まず貨幣の本質が十分に究明されなければならないことになります。

ところが、貨幣はまた、これを十分精確に分析し追究してゆきますと、それは、貨幣商品であること、つまり「貨幣」という規定をもった商品、またはより詳しくいいますと、「一般的等価物」という特別の社会的形態を独占している商品だということがわかります。ということは、貨幣の本質を十分正しく究明するためには、それに先だって、そのような特別の規定をもたない、ふつう一般の商品について、「いったい、商品とはどういうものか」という、その本質を正確に究明しておかなければなりませんし、また、なんら特別のの規定もない商品の本質についての十分な把握がなしとげられてその上ではじめて、「一般的等価物」という規定がどのようにして必然的に生まれ、発展して、そこに「一般的等価物」という規定を独占する特別の商品が必然的に生まれたのかということが十分に解明されうることになる、というわけです。ですから、貨幣の本質の究明に先だって、商品の本質の究明が必要不可欠です

し、その商品の本質の究明がなされたのち、その究明にもとづいて、はじめて貨幣の本質の究明が可能ともなり、また必然ともなるということになっています。

右のようにして、商品から貨幣に、貨幣から資本にという展開の仕方は、それらの範疇そのものの意味内容を考えるとき、概念的にみてきわめて正しいものということができます。つまり、それはもっとも簡単な、したがってまたもっとも抽象的なものから、論理必然的に規定を加えることによって、つぎつぎとより複雑な、より具体的なものへと上向してゆく論理的発展をあらわしたものであるわけです。ところが、この商品——貨幣——資本という展開の順序は、たんに論理的にみて正しいものであるばかりではありません。実際に人間社会の歴史において、生産物交換という形で商品交換がはじめられ、労働生産物の多くが商品形態をとるようになると、そこに必然的に貨幣商品が生まれてきたものですし、また、商品生産と貨幣流通が相当程度に発展すると、貨幣は、たんなる貨幣から価値増殖する貨幣に、つまり資本になり、ここにはじめて資本という範疇が現実に現われることになったものです。ですから、商品—貨幣—資本という展開の順序は、人間社会の経済生活における現実の歴史的発展に正しく対応した発展順序であるといわなければなりません。

ごらんのように、商品—貨幣—資本という範疇の発展の系列が、論理的にみて正しい発展関係をあらわしているばかりでなく、また、客観的な歴史的発展過程に正しく対応したものであるということは、きわめて重要な、決定的ともいえる意義をもっているものです。それは、経済理論が科学的にみて真に正しいものであるか否かを決定するもっとも基本的な要件であるからです。なぜならば、経済学は、論理学などとはちがって、りっぱな一個の歴史科学であって、それが究明すべき対象は、人間社会の歴史的な発展法則、厳密にいいますと、経済的な歴史的発展法則そのも

のであるからです。ですから、たんに論理的にみて範疇の展開が正しいかどうかということだけあげつらうのは、そもそも歴史科学としての経済学の意義を見失ったものと言わなければなりません。いわんや、歴史的な発展関係などはその眼中にさらさらなく、そのうえ、論理的展開などまったく薬にしたくとも見られないような、完全な屁理屈と強弁の羅列で、この資本主義社会の永遠性を「合理化」することに血道をあげている御用学問＝「近代理論経済学」など、とうてい科学の名に値する資格など、これっぽっちもあるものでないことは、右によっても明白といわなければなりません。(3)

(3) なお、右のような科学的理論についての論理的発展と歴史的発展との対応の必要性ということに関連して、『資本論』第一巻第一章の冒頭でとりあげられている商品について、「それは資本主義的商品と考えるべきだ」といった解釈が「専門家」の間で行なわれているかに聞いていますので、この点について、簡単な注意をしておきたいと思います。これらの人々は、おそらく、資本主義社会の商品であるから、それは、必ず「資本によって生産された商品」、つまり「資本主義的商品」でなければならないと考えられたものと思われます。しかし、このような解釈は、マルクスの第一章冒頭の文章を正確に読みとっていないこともさることながら、さきに本文で説明しました論理的展開ということがその眼中から消え失せてしまっていることをうかがわせるものと言わなければなりません。

まず、冒頭の文章について申しますと、マルクスは、

「資本主義的生産様式が支配的に行なわれている社会の富は、一つの『巨大な商品の集まり』として現われ、一つ一つの商品は、その富の基本的形態として現われる」（前出、第二三巻、四七ページ、傍点—山本）

と述べています。私が傍点をつけた文字をよく見ていただけばわかるように、この資本主義社会の「富」を生産しているものは、資本家ばかりでなく、独立生産者や独立生産者兼賃銀労働者の人々も小さくない比重をもって存在しています。これらの人々の生産する「富」、つまり商品は、「資本主義的」という規定など持ちようもないもの、つまり「資本主義的ではない、たんなる商品」です。

つぎに理論的にみて重要なことは、「資本主義的商品」という言葉の正確な意味です。これは、明らかに「資本によって生

産されて、剰余価値をふくんでいる商品」ということでなければなりません。つまり、資本を前提し、剰余価値という概念を前提した商品ですし、資本と剰余価値とについての概念をその大切な要素としている言葉にほかならないものです。ところで、第一章第一節のどこに資本という概念についての説明があるでしょうか？　いったい、そこに、剰余価値などという、複雑な概念についての知識が必要な前提として示されているでしょうか？

およそ文字を読むことのできる人であれば、第一章第一節でとりあげられているのは、たんなる商品であって、そこにはまだ貨幣も資本もまったく前提されてはいないこと、そして商品のうちから貨幣がはじめて生まれること、その貨幣があとになって――歴史的な発展の結果として――はじめて価値増殖する貨幣、つまり資本になるものであることが、ずっと先きに行って解明されているということを、読みとれないものは、ひとりもいられないはずです。

要するに、理論的な言いあらわし方をしますと、右のような解釈をする人々は、科学的な理論体系について、それは、もっとも簡単な、それゆえにまた規定のもっとも少ない、もっとも抽象的な概念＝範疇から出発しなければならないということ、そして、そのもっとも抽象的な範疇に――それ自身の自己発展として――規定をただしく順序だてて加えてゆくことによって、しだいにより多くの規定をもった、より複雑な、より具体的な範疇を展開して行かなければならないということ――こうした科学としての基本的な方法が十分に理解されていないということになります。ですから、百歩ゆずって、資本主義社会の商品がすべて資本家の生産した「資本主義的商品」であるとしても、経済学の理論体系の端緒に位置するものは、つまり『資本論』の「冒頭の商品」は、その「資本主義的」という複雑な規定をすべて一応捨象したところの簡単な商品、いわゆる「単純な商品でなければならないというのは、自明のところといえます。

さらにいまひとつ付け加えますと、マルクスの書いたものだけを材料にして、マルクスの叙述をひん曲げて解釈することばかりして、マルクスの理論の「欠陥」やら「誤謬」やらを指摘することだけに熱をあげている自称「マルクス経済学者」の教授先生は、右の冒頭の商品がもっとも簡単な範疇、つまり「単純な商品」であってこれから理論体系が正しく展開されなければならないとするマルクスの考え方にケチをつけるために、「マルクスは単純商品生産社会を前提して、そこでの単純商品を冒頭に据えるという、重大な誤りを犯している」と、得意になって論じたてておいでですが、これなどは、この大先生の常套手段である錯乱的論法をみごとに示したお手本で、かぎりなく憫笑を誘うものだといわなければなりません。「単純な商品」という概念をたちまちひねって、マルクスが夢にも考えない「単純商品生産社会」という、マルクスがまったくあずかり知ら

ない、うそっぱちの「社会」を捏造して、マルクスがこれを主張しているなどといった「非難」を書きたてるとは、また、なんと堂にいった玄人はだしのイカサマ師であることでしょうか！

さて、「商品の法則」という表題のもとに以上長きにわたって説明してきましたのは、マルクスによってうちたてられた科学的な価値概念の基盤ともいうべきものをはじめにまずしっかりととらえておくことが肝要であると考えたからです。加えて、さきに説明しましたように、マルクスにあっては、価値概念は商品の法則の把握から必然的に導き出されてくるものであると同時に、商品というもっとも基本的な範疇の不可欠の一構成部分ともなっているもので、私たちは、その意味で、まず商品の法則の幅広く奥深い全内容をしっかりととらえておくことが必要であるとともに、きわめて適切であると考えられたからです。

さきにこの小論の「二」でイギリス古典学派の価値概念について、そのおよその問題点について述べられたことと、ここで商品の法則の内容についてかなりに詳しく説明しましたこととを読みあわせていただくことができれば、古典学派の価値理論もマルクスの価値理論もまったく同じように「労働価値説」と呼ばれてはいますが、それら二つの間にはたいへん大きなへだたりのあることが、容易に感じとられたのではないかと思います。価値という同じ言葉についての理解にしても、古典学派のそれとマルクスのそれとでは、まったくちがったものとなっています。そうした価値についての考え方の違いは、なによりもまず労働という言葉の意味内容についての理解の根本的相違に結びついているものであることに、私たちは注意することが肝要と思います。

そこで、右のような労働の意味内容についての古典学派の考え方から脱皮して、マルクスが、価値という言葉の内容をどのようなものにまったくつくりかえてしまったものかということを、つぎによく見ておきたいと考えます。そ

の場合、私たちがいちばん力点をおいてとらえておかなければならないのは、まさしく「労働の物化と自立化」ということではないかと考えましたので、これをこの「(4)　商品の法則」の副題としてあげておいたわけです。この「労働の物化と自立化」ということがマルクス価値概念においてどんなに決定的に重大な意味をもっているかということを明確にとらえていなければ、マルクスの価値概念を十分正確に理解することができたとはいえないと思いますが、しかし、この肝心の「労働の物化と自立化」ということの意味内容を説明するにあたっては、やはりマルクスの用いている意味での「価値」という言葉をどうしてもとり入れなければならないという事情があります。マルクスの見地に則して「労働」と「価値」との不可分のかかわりを明らかにしようというのですから、そこにマルクスの言うところの「価値」という概念がすでに出てきて、それについての大切な意味が説かれることになるのは、見方によっては、止むをえないところともいえましょう。

ですから、つぎの(二)では、「労働の物化と自立化」という点を中心とも基本ともしてそれとのかかわりでマルクスの価値概念の要点をあらかじめ明らかにしておこうというのが、その狙いとなっているといえます。そして、この(二)でのざっとした説明によっておそらく明らかにされると思われるマルクス価値概念の輪廓をふまえて、その価値概念を組み立てている骨格の主要なものについて、それぞれの基本的意義を簡潔に指摘しておこうというのが、つづく「(5)　価値概念の骨格」のうちのそれぞれの小節の課題となっているものだということです。この(4)の説明がいささか長きにわたらざるをえなかったことと、その表題がまたとりつきにくいものだということについて諒承していただくために、以上、説明を補足させていただいた次第です。

(二)

古典学派の価値概念の基本が、商品を生産するにあたっての人間の労働そのものが人間にとってのねうちであるというところにおかれていたことは、さきに見たところです。生産者個人の労働そのものが生産物＝商品の価値であり、その交換価値である、というわけです。その生産者の労働が、社会的にみて標準的・平均的な質のものでなければならないとする点はなかなか適切なものであるとはいえますが、しかし、たとえりっぱに社会的・標準的な質の労働をしたからといって、それでどうしてその労働生産物が交換価値をもつものとして通用することになるでしょうか？

この資本主義社会ではその成員個人はみな互いに無関係の独立した個人であって、その私的に所有する生産手段をつかって、自分だけの計算で、自分のために労働をしているのであって、社会によって命ぜられて、社会にとって必要な労働をしているわけではありません。そのような、まったく私的な個人的労働が、どうして他人にとって、そしてまた社会にとって、ねうちをもつものだといえましょうか？　古典学派は、社会的分業にばかり目を奪われて、この肝心の生産手段の私的所有という生産関係を、そしてこの私的所有によって規定された私的労働という根本的特徴を、すっかり見落としてしまったものです。古典学派が見落したといえば、いまひとつ、労働の二面性ということがあります。生産者の行なう労働が、労働生産物＝商品の使用におけるねうちと交換におけるねうちとを生みだすとすれば、その使用価値と交換価値とは――スミスが正しく指摘しているように――まったく違ったものですから、使用価値を生みだす労働と交換価値を生みだす労働とは、あきらかに性格のちがったものでなければならないはずです。つまり、さきに説明した労働の二面性を明確に区別して把握しなければならなかったのですが、この肝心の点も見落

したものです。さらに立ちいって言いますと、私的個人の労苦は彼個人にとってのねうち＝価値にすぎないのに反して、生産物＝商品のねうちは、特定の個人にはかかわりのない、社会的に通用するねうちでなければなりません。ここにも、生産者にとってのねうちを生産物＝商品そのもののねうちに結びつけることが妥当でないということが示されています。こうした難点はまた、生産者にとってその生産における労働はまったく変わりなくても、その生産物＝商品の交換におけるねうち、つまり交換価値は、事情いかんでいくらでも変わるという、古典学派にとって解決困難な問題にもあらわれています。

では、マルクスは、私的所有という生産関係と、労働の二面性とを考慮にいれて、どのように説明しているでしょうか？　すでに大方の読者諸君にはおわかりと思いますが、念のため、その考え方の基本を簡潔に述べてみましょう。

まず、労働とは、いうまでもなく、各生産者が担っている人間労働力を支出すること、または流動させることです。それは、ひとつの運動であって、彼がその労働力を流動させているときは、そこに労働が在るわけですが、流動が終われば、もはや労働は無いことになります。私的生産者は、自分だけの計算で、自分だけの思惑で、労働力を支出して、生産物をつくるわけです。なるほど、その労働は、彼にとってはりっぱな労苦であり、ねうちのあるものですが、だからといって、その労苦によってつくりだした物をもって、どうして価値ある物として社会的に通用するものだなどと言えたものでしょう。

では、私的生産者が労働生産物＝商品を生産したとき、彼の労働は、どのようにして社会的に「価値あるもの」と認められるものとなることができるでしょうか？

彼の労働は私的労働であってしかもひとつの運動にすぎないものですから、先ず、どうしてもそれを目に見える対象、つまりひとつの物として社会に出してみることにしなければなりません。ということは、彼は、その労働力の支出、つまり労働によってひとつの生産物をつくりだして、その労働生産物を社会に提供しなければならないということです。理論的に言いますと、流動状態にある労働そのものではなく、ひとつの物に、――正確にいえば、労働生産物に――対象化して、労働生産物というひとつの物の形をとっているところの労働を出さなければ、ということです。つまり、生きた労働ではなく、それが物の形をとって人間の外にある対象"物となっている労働ということで、これが副題に示された「労働の物化」ということです。

ところで、問題はただ労働の物化ということだけで解決されるものでもありません。まず、その「物化」の内容についてみますと、さきにこの「三」の(3)で明らかにされた労働の二面性ということが、当然に考慮されなければなりません。私的生産者は具体的有用的労働という一面によって、ある特定の自然的形態をそなえた生産物をつくりだす必要があります。つまり、一面の具体的労働を労働生産物の自然的形態に「物化」させるということです。そして、その労働生産物そのものを社会に出して、それの自然的形態が他人にとって、いいかえれば社会から見て、有田なものだということが実証されたとき、その私的生産者の私的労働は、はじめて社会的に有用な、社会の存続を支えるひとつの労働、つまり社会的労働の一分子を担うものとして通用することになるのです。簡単にいえば、彼の労働の一面である具体的労働が労働生産物の自然的形態に「物化」して、その自然的形態が社会的な使用価値をもつものとして認められたときに、その私的生産者の労働は、社会的労働と成ることができ、そのときはじめて、その労働生産物"商品は、それとひきかえに彼の必要とする他人の生産物のある量を獲得するねうち、つまり交換価値をもつものと

なるのです。

だが、まだ、他の一面である抽象的労働の問題があります。この抽象的労働は、その支出の形を問題にしない、人間労働力の支出そのものであって、たとえばアダム・スミスが人間にとっての労苦といい、またそれが交換価値の大きさをきめるものだとしたのは、このような抽象的人間的労働を――それとはっきり意識することなく――指して言ったものです。スミスは、この人間的労働の量によって交換価値の大きさがきまるものとしたさい、賢明にも、その労働の質に注目して、それは、社会的に正常な平均的な質のものでなければならないということを指摘したものだということは、さきにふれられました。しかし、いくら社会的に正常な平均的な質のものであるといっても、労働そのものではなんの意味をももちえません。これもまた、「物化」した形態において社会的に実証することのできるものとならなければならないのは当然のことです。つまり、抽象的人間的労働も、その労働生産物という形をとって人間の外にある「物」と成らなければならないわけですが、こちらは、他の一面の具体的労働とちがって、人間の感覚をもっては絶対にとらえることは不可能で、ただ、その労働生産物の中にそういう物の形をとってそこに、ある一定分量の抽象的労働が、つまり何時間分かまたは何日分かの人間的労働が、堆積している、またはそこに結晶としてふくまれているということがわかるにすぎないのです。このように、労働生産物の中に、それと見えませんが、凝固した形で、もしくは、結晶として存在している抽象的人間的労働というもの、つまり「物化」した抽象的人間的労働が、その労働生産物＝商品そのものそなえている社会的なねうち、つまり価値となり、社会的な力となるのですが、この価値も、価値の大きさも、商品についてそれとしてとらえることはやはり絶対にできないのです。なぜならば、各私的生産者個人の抽象的人間的労働の質は、まことに千差万別であって、どれが社会的平均的な質の人間的労働であるか

はとらえようもなく、したがってまた、その社会的平均的な質の労働がその労働生産物＝商品にどれだけふくまれているかなどということは、どんなに完全・精巧な電子計算機をもってしても算定することはまったく不可能であるからです。では、労働生産物＝商品が価値をもっていること、また、どれだけかの大きさの価値をもっていることは、商品生産者にとってまったく感知することもできないかというと、それはそうではないのです。というのは、それは、その労働生産物＝商品を社会に出して、他人の労働生産物と交換することによって、いいかえれば、当の生産物が交換におけるねうち、つまり交換価値をもつことによって、しかもある大きさの交換価値をもつことによって、客観的に――社会的に――実証されるからです。ただし、ここでは、説明の便宜上、「実証される」というように申しましたが、より厳密正確には、つぎのように言わなければならないのです、――労働生産物が商品として価値をもっていること、ある一定分量の価値をもっていることは、必ず、それが交換価値をもっていること、ある大きさの交換価値をもつものとして現われなければならない、つまり、交換価値は、本質である価値の必然的な現象形態である、と。ここに、本質とか現象形態とかいった難しい言葉をつかいましたが、それは、価値という、いわば隠れた本質的なものが必ず交換価値という目に見える形をとって現われなければならないということ、しかも、その場合に、交換価値の大きさはつねに必ずしも価値の大きさとは正確に一致することなく、むしろそれから離れたものとして動くものだということをよくとらえていただくためにも、必要であると考えたからです。交換価値は目につきますから、古典学派もこれに執着して、そのためにその奥にある本質としての価値というものは感知することすらでなかったものです。商品の交換価値は、後段で明らかにされるように、商品生産が発展して貨幣商品が出てきますと、商品の価格という形態に発展しますが、この価格も商品価値の必然的な現象形態にほかならないのです。ところが、このことが

わけわからず、価値をまったく見失ってひたすら価格にばかりしがみついてあれこれ御用「理論」をひねくりまわしているのが、しゃれた名前の「近代理論経済学」というものです。古典学派が肝心の人間的労働を基本に据えるべく努めたのに比べると、なんという俗流化であることでしょうか！

要するに、私的所有にもとづく商品生産社会では、私的生産者の私的労働は、労働生産物という形に物化しなければならないのであって、その場合、私的労働の一面の具体的労働は労働生産物の自然的形態に、そして抽象的人間的労働は労働生産物のうちに凝固・結晶させてその価値に、それぞれ対象化させて、この労働生産物を社会に出し、その労働生産物そのものの自然的形態が社会的な使用価値をもったときはじめて、その労働生産物は社会的に商品として認められ、その商品そのもののうちにある価値の大きさに応じて、その交換価値の大きさがきまり、それによって私的交換されるものになる、というわけです。

それゆえ、労働生産物は、なるほど人間の労働によってつくられ、人間にとっての労苦に値したもの、つまりねうちのあるものですが、私的所有のもとでは、生産された労働生産物は、労働した主体である人間に対立して、それ自身が、物として独立に、社会的な使用価値と価値とをもつものになり、その商品自身のもつ価値の大きさによってその交換価値がきまり、これによって当の生産者である人間の取得するものがきまるということになっているわけで、私的生産者である人間自身が、彼自身の生産物である商品によってその死命を制せられるといった関係が、そこにいやおうなく現出することになっているのです。

以上の拙い説明によって、商品における「労働の物化と自立化」ということの意味内容が、そして、それがマルクス価値概念の正確な把握にとって決定的な意義をもっているということも、あらましおわかりいただけたかと思いま

すので、その説明されたところをもとにして、つぎに、マルクス価値概念のうちの「骨格」をなしていると考えられる三つの事柄について、簡単に述べることにしたいと思います。(4)

(4) ここに説明しました「労働の物化と自立化」ということがマルクスの科学的な価値概念の理解にとって決定的な鍵ともなっているということをよくおわかりいただくために、ひとつの実例をあげておきたいとおもいます。それは、ひところ、熱心な婦人解放運動の指導者たちによって唱えられていた「婦人の家事労働も価値を生む」という主張です。

まず、家事――育児、料理、洗濯、掃除など――労働は、自分と家族のための労働であって、社会的分業の一環を担う私的労働ではありません。その労働は、労働生産物＝商品に物化＝対象化するものでもなく、また他人のための社会的使用価値をつくりだすものでないことは明らかです。さきに私は、「労働そのものはなんらの価値も価格ももたない」というマルクスの重要な命題を紹介しましたが、この命題をはっきり念頭においていないときには、価値について論ずることはできないのです。右の主張については、「婦人の解放」という重大な問題についてのきわめて安易な心構えがうかがわれて、たいへん残念に思います。「家事労働」によってたとえ相当額の貨幣を取得することができるものとしても婦人が依然として家事労働にしばりつけられているかぎり、それによって、どこに婦人の解放があるといわれるのでしょうか？　「婦人の解放」は、社会のすべての人間の解放のうちにふくまれるべきものです。人間の解放の問題は、そもそも人間社会のあり方の問題であり、また、真に社会的人間としてのあり方を保証する新たな社会機構の建設をぬきにしては、とうてい解決されるものではないということを、私たちはよくよく考えることが大切だと、私は考えるものです。

(5) 価値概念の骨格

つぎにとりあげられる三つの事柄は、いずれも『資本論』第一巻第一章「商品」のなかでマルクスが明確に述べているところです。その(イ)と(ロ)とは、第一章第一節「商品の二つの要因　使用価値と価値（価値の実体　価値の大きさ）」という表題の丸括弧で示されている二つの主要な構成部分の内容について、私がとくに重要だと考える側面をとりだして、簡単な解説をこころみたものです。そして、(ハ)は、さきの「労働の物化と自立化」という重要な特徴を

「商品の物神的性格」という言葉をつかって、より明確に、またより幅広く究明している第一章第四節の内容について、とくに「人間支配」ということに重点をおいて、これを簡単にまとめたものということができます。ただ、いずれも、マルクスの叙述のひと通りの解説ということではなく、マルクス価値概念の骨格を成すものとしてぜひとも明確に把握しておく必要があると私が考えています論点をとりあげて、それを中心として簡潔に、要約して説明することにしたものだということを申しそえておきたいと思います。

(イ)価値の実体と価値

この、一見すると同義反復ではないかとおもわれる長題をかかげましたのは、私なりの考えがあってのことです。それを説明するまえに、まず、順序として、マルクスが『資本論』第一巻第一章第一節において、古典学派のそれとはまったくちがった、独自の価値という概念をどのように導き出してきたかという、その筋道を簡単にかえりみておくことが適当かと考えます。

マルクスは、まず商品が使用価値と交換価値との担い手であるという、誰の目からみてもよくわかる商品の現象形態をとりあげ、使用価値については、その商品の自然的形態によって規定されるもので理論的に分析を必要とするものでないが、交換価値については分析が必要であるとして、使用価値は一応措いて、交換価値をとりあげます。なぜ交換価値について論究が必要かといえば、同じ一つの商品について見ても、その交換価値、つまり他人がそれとの交換に供する商品の量、いいかえれば交換割合は、時と所によっていろいろに違ったものとなっていて、一定したものでないという事実があり、したがって、同じ一つの商品がそれ自身の中に一定不変の交換価値をもっているという言葉は、矛盾したもの、つまり「形容矛盾」ではないかという、それまでの――つまり、古典学派以来の――交換価値

概念についての重大な問題点にマルクスが着目したからです。とはいっても、マルクスはすでに古典学派の価値概念の欠陥を、したがってその交換価値概念の誤りをも徹底的に批判しつくして、彼自身の科学的な価値概念は完全に確立していたのであって、右のような問題提起は、ただ、問題の所在とその意味を読者に覚ってもらうためのひとつの叙述方法であったといわなければならないのです。このような、問題への導入の仕方は、なかなかよく考えぬかれているものだという点を、私たちは見落してはなりません。というのは、交換価値が、一方において時と所によってたえず変動する価値＝ねうちであるのに、それが商品それ自身の中にある固有の、一定不変の価値＝ねうちでなければならないという「形容矛盾」は、マルクス自身の交換価値の分析を通じて価値概念が明確にうちだされることによって、解決されていたからです。つまり、その「形容矛盾」というのは、実は、一方の商品に内在する固有のねうちというのが商品それ自身の価値であり、他方の変動してやまないねうちとはその商品自身の価値が外に現われたものとしての交換価値であって、こうした本質としての価値にたいしてその必然的な現象形態となっているのが交換価値だということ、つまり、本質と現象形態との関係を正しくとらえることができないで、たんなる表面上の現象にとらわれたために生じたものだということ、――このことが、はっきりと解明されることになっているからです。

しかし、マルクスは、まだその解決は伏せておいて、まずもって右のような「形容矛盾」という問題をもった交換価値を分析しなければならないと述べて、改めて交換価値を正面から取りあげることにしています。この交換価値の分析は、もっぱら抽象的な論理を厳密・正確に適用し展開することをその柱としていますので、その意味内容を十分ただしくとらえることは、けっして容易ではありません。マルクスも、『資本論』のフランス語版の編集者、モリス・シャトルにあてた一八七二年三月一八日付の手紙の中で指摘しているように、こうした「経済上の問題にはまだ適

用されたことのない分析の方法」は「いつでも性急に結論に到達しようとし、一般的な原則と自分の熱中している直接の問題との関連を知りたがるフランスの読者」が「読みつづけるのがいやになりはしないか」（前出、第二三巻、二四ページ参照）ということを恐れたためでしょうか、この交換価値の分析のきわめて重要なパラグラフの肝心の部分は、フランス版ではすっかり省略されています。しかし、私としては、この肝心の部分を正しく把握することがないために、それにつづくマルクスの叙述についてまったく見当ちがいの「批判」を考え出す向きも少なからず見受けられるように思いますので、やはり、簡潔にでもこの部分の分析内容の要点を説明しておくことが必要と考えます。

マルクスは、まず、一つの一商品、一クォーターの小麦がさまざまな商品と、たとえば、x量の靴墨、y量の絹、z量の金、等々と交換されている、つまり、それらを交換価値としてもっているというありふれた事例をとりあげて、これらの商品はさまざまに異なってはいるがしかし同じ一商品、一クォーターの小麦の交換価値であるという点を根拠として、そこから、まず、右の諸商品、つまり、「x量の靴墨、y量の絹、z量の金などは、互いに置き替えられうる、または互いに等しい大きさの、諸交換価値でなければならない」という事実関係を明確にしたうえで、つぎにここから二つの論理的帰結を導き出しています。その「第一」は、「同じ商品の妥当な諸交換価値[5]は、一つの同じものを表わしている」ということであり、その「第二」は、「およそ交換価値は、ただ、それとは区別される或る実質の表現様式、『現象形態』でしかありえない」ということです（以上、前出、第二三巻、五〇ページ参照）。

（5）この「妥当な交換価値」というのは、一般に通用する交換価値、つまり、その商品についての需要と供給とが甚しく違っているような場合の交換価値ではなく、それらが大体均衡がとれていて誰もがまず妥当なものとする交換価値、つまり交換割合を指して言ったものです。

ここに示されている論理的帰結の「第一」の意味内容はそれほど理解し難いものではないように思われます。というのは、それら「交換価値」は、同じ一つの商品、一クォーターの小麦の交換価値ですから、当然に、「一つの同じものを表わしている」ものだからです。そこで、追究されるのは、その「一つの同じもの」とはなにか、ということになります。それにたいする答えが「第二」の「帰結」であるわけですが、その内容は、マルクス自身も認めていると思われるように、なかなか難しいものです。そこで、右の「第一」から「第二」へのいわば移り行きがどのようなことになっているかということについて、私なりに考えたところを申しあげ、それにもとづいて「第二」の内容をも説明することにしたいと考えます。

まず、そのさい、私たちがよく注意してその意味を正確にとらえつづけていかなければならないのは、ほかでもない交換価値という言葉です。右の例でいいますと、一クォーターの小麦の交換価値とは、一クォーターの小麦がもっている「交換におけるねうち、役だち」であります。その、一クォーターの小麦の、その生産者（もしくは所持者）にとっての「交換におけるねうち、役立ち」が、x量の靴墨であり、y量の絹であり、z量の金であり、等々なのです。このようにいろいろちがった物としてあらわれているもの、それらの物そのものが、とりもなおさず、同じ一クォーターの小麦の交換におけるねうち＝役立ちであります。また同じ一クォーターの小麦の交換におけるねうち＝役立ち、すなわち交換価値というものは、商品の中にあるひとつの実質ともいうべき内容そのものが外部に表わされるときの形ともいえるものであって、そのいろいろにちがった表現形式の奥には、商品そのものに固有の、かくれた内容、もしくは実質というものがあるということを示しているものと解されなければならない、というわけです。そのかくれた

内容もしくは実質が、「第一」で指摘されている「一つの同じもの」という、商品に固有のものにほかならないのです。ですから、マルクスは、右の「第二」において、商品の交換におけるねうち＝役立ちというものは、あるかくれた内容、もしくは実質が外部に表現される形式であり、その内容＝実質が目に見える形で現わされているものだ、と述べているわけです。(6)

(6) この「かくれた内容」の原語はGehaltというドイツ語ですが、これは外部にあらわれている形式（Form）に対して、それの内容を成しているものを指していった言葉です。ですから、ただの「内容」としたのではその正確な意味がくみとれませんし、また邦訳大月版のように「実質」と訳しても、隔靴掻痒の感を免れないところです。なお、この「第二」で、マルクスは現象形態という言葉に括弧をつけていますが、これは、括弧をとりますと、論理的に厳密な意味の現象形態、つまり、ある一つの本質があってそれが必然的に現象するものとしての現象形態ということになります。ここではまだそれに対応する「本質」は出てきていませんので、ただ、ある「かくれた内容」が目に見えるように現われたものというだけの、つまり通俗的な意味の現われる形というだけのことを指したものとして、括弧をつける必要があったわけです。しかしその括弧つきの「現象形態」である交換価値の分析によってそれが商品の奥にある価値という「本質」の必然的な現象であることが確認されえたあとでは、当然のことですが、括弧をとりはらって、本質に対応する、本質そのものの現象形態であることが明示されることになっているのです。

さて、そこで、つぎに当然究明されなければならないのは、それらのさまざまな交換価値という形をとって外に現われているところの、当のかくれた内容、または実質とはなにか、ということです。それには、さきに「第一」として確認された「一つの、共通な、同じもの」ということが有力な手がかりを示しています。そこで、今度は、小麦と鉄という、二つの商品だけをとりあげて、それらの交換関係をば、さきの論理的帰結を念頭において論究するという方法がとられることになり、まず、この交換関係は、ひとつの等置関係であって、その関係そのものは、右の二つの

商品のうちに「同じ大きさの共通物」がふくまれていることを示すものだということが明らかにされます。そして、その「共通な物」とは、小麦でも鉄でもありえないことがもう一度強調されて、さてそこで、今度は、その「共通物」いいかえれば、交換価値という形で表現されている当の「かくれた内容、または実質」を突きとめることになる、という次第です。

さきの「第一」および「第二」によって、交換価値は「かくれた内容」の「表現様式」にほかならないことが確認されているのに、なぜ、そこですぐさまその「かくれた内容、または実質」の正体を突きとめることをしないのかといえば、改めて二つの商品の交換関係＝等置関係という形をとりあげてこれを論理的に分析するという方法をとらないかぎり、一方の小麦にたいする他方のさまざまな商品との交換関係そのものによっては、その「共通物」＝「かくれた内容」をいわば「抽出」する手だてがないからです。二つの商品だけをとりあげてその等置関係、つまり「等式」について、「共通物」を「抽出」することは、つぎに見られるように、きわめて事理明白な形で、簡単に遂行することができるのです。ただし、右の等式についてその「共通物」を論理的に「抽出」するにあたっては、これら二つの商品は、この場合、交換価値の担い手であるものとしてのみ、または、それら自身交換価値であるかぎりでのみ、論究の対象となっているものだということをはっきりと確認しておくことが肝要です。というのは、この点を見逃してしまいますと、つぎに見られるいわゆる「抽象の過程」について、さまざまの愚にもつかない異論や批判がいくらでも出てくることになるからです。

右の等置関係、つまり小麦＝鉄　という――もっぱら交換価値を基準とする――等式について、その両辺の商品から、相異なる性質を捨象するという手続きをとって、「共通物」を抽象してくるという方法と、その抽象の結果とに

ついては、大方の読者諸君もよく知っていられるところと思いますので、簡単に述べさせていただきますと、使用価値が異なっていればこそ交換されるのですから、この使用価値に結びついたいっさいの性質、つまり自然的諸形態は捨象されなければなりませんし、したがって労働生産物という属性だけが共通なものとして残ることになりますが、その労働も、使用価値をつくりだす具体的労働は異なっていますので、それら労働の具体的諸形態を全部捨象しなければならず、したがって、その「共通な」労働というのは、その支出の形態の違いを消し去った、ただ人間労働力を一般的に支出しただけという意味での抽象的な人間的労働でなければならないということがわかります。

右の到達点、つまり抽象的人間的労働というものを踏まえて、マルクスは、改めて、二つの商品についてそれらの相異点を一つ残らず捨象することによって、いったい、両者に、「共通物」としてなにが残るかということを考えて、そこに残っている「共通物」は、「その支出の形態にはかかわりのない人間労働力の支出のただの凝固物」だけであり、それは、「幻のような対象性」、つまりそこにただ人間的労働が積み上げられているということだけがあるにすぎない、と答えていますが、まだその「共通物」そのものが価値であるとは言っていません。といいますのは、マルクスは、右のようにして確認することのできた抽象的人間的労働を、「共通な社会的実体」と呼び、この「実体」の「結晶」が価値—商品価値になっているのだ、と結論しているからです。そして、ここにはじめて、『資本論』のなかでマルクスによってその内容が厳密に規定されたものとしての「価値」という言葉が、——厳密に言いますと、概念が——打ち出されることになっているのです。こうしてこの価値概念の最初の定立にもとづいて、マルクスは、改めて、

「商品の交換関係または交換価値のうちに現われる共通物は、商品の価値なのである」

とはっきり述べ、さきの交換価値は、本来この「価値の必然的な表現様式または現象形態」にほかならないのだという最終的「結論」を述べています（前出、第二三巻、五二ページ）。

さて、右のようにして、マルクスによる科学的な価値概念の確立にいたるまでの論理的分析の過程をあとずけてゆきますと、いずれも事理明白で問題はないかのように思われます。そのように考えて私も読み過していたものですが、この小論の「まえがき」でもふれましたように、「市場価値」という概念の内容を明確にしなければならないという問題にぶつかって、はじめて自分の読みの浅いことを痛切に思い知らされたものです。

私の場合、正確にとらえていなかったこと、というより、むしろ誤ってとらえていたことと申しあげたほうが正確と思いますが、価値の実体と価値との違いと関係ということです。もっとわかりやすくいえば、要するに、「価値とは、なにか？」ということが明確につかまれていなかったのです。

私が誤読に引きいれられたのは、さきに見てきた交換価値の分析を通じてマルクスが「人間的労働の積み上げ」ということを「抽出」して、それについてはじめて価値という言葉を明示している、つぎの文章です。

「このようなそれらに共通な社会的実体の結晶として、これらのものは価値――商品価値なのである」（前出、第二三巻、五二ページ、傍点―山本）。

この文章のうちで私が傍点をつけた文句、「これらのもの」は、いったい、なにを指しているものと解すべきでしょうか？　不注意にも、私は、それとはっきり考えることもなしに、これをすぐ上の社会的実体の結晶と受けとったのです。そこから、価値とは「抽象的人間的労働の結晶」であるという「理解」が出てきます。「抽象的人間的労働が商品の形の中に『結晶』しているもの」、簡単にいえば、「抽象的人間的労働のかたまり」が、とりもなおさず、商

品の「価値」である、――このような考え方が私の頭を支配していたものです。さきにこの小論の「まえがき」で申しあげたように、価値理論の展開を追究するという仕事も、右のような「解釈」を前提して、一応曲りなりにも筋の通った形をとって遂行することはできましたが、しかし、その過程において、すでに右の「解釈」についての疑念はしだいに大きくなってきていたわけで、それがついに「全面的崩壊」ということになったのは、「市場価値」という概念の正確な把握が当面の緊急の課題となったときです。簡単に申しあげますと、市場価値は、商品の中に対象化している「価値の実体」、つまり社会的平均的な質の抽象的人間的労働の対象化した量そのものによっては規定されるものではなく、むしろ、その「実体」の対象化量から離れてその他の要因によって規定されるものとなっています。文字通りの浅学非才がここにいたって自ら暴露されることになったわけで、私は、いろいろ考えた末にようやく、「価値の実体」の「結晶」そのものと「価値」とはけっして同じものではないこと、つまり、「抽象的人間的労働の結晶」そのものは「価値」ではないこと、「抽象的人間的労働の結晶」として、その「結晶」であるかぎりで商品そのものが「価値」なのである、という理解に辿りついたものです。この場合の「価値」は、この小論の「一」で見たような、人間主体にとってのねうち、役立ちといったようなものでないことは、いうまでもありません。それは、商品という、人間の外部にある物そのものが主体となっていて、その商品そのものがひとつの「社会的なねうち」または「社会的な力」であるということを示したものなのです。

なお、「価値の実体」＝抽象的人間的労働の結晶そのものをそのまま「価値」とする考え方を「自己批判」するきっかけは、右のほかに、社会主義社会についての拙い論究の中でも与えられたものです。共産主義社会をふくめて、およそどんな歴史的な人間社会でも、人間的労働がなければ一日たりとも存続できないことは、さきに「三」の(2)で

見たところです。人間的労働の結晶としての労働生産物はどんな社会でも、その社会を支えるものとしてありますが、しかし、私的所有にもとづく商品生産社会を除いては、どこでも、労働生産物は商品とはならず、また価値など薬にしたくともありえません。

ですから、私的所有という生産関係にもとづく社会ではじめて、労働生産物に対象化した抽象的人間的労働の結晶そのものによって、その労働生産物＝商品は、はじめて価値に、つまり社会的なねうち、または社会的な力となるものなのです。ことようにしてはじめて、「価値の実体」と「価値」との違いと関係ということを、マルクスの教示に照らして正確にとらえることができるのではないかというのが、現在の私の到達しえたところというわけですが、ここにようやく到達してみて、私は、永いこと解くことのできなかったマルクスの言葉、つまり、「商品は使用価値および価値であり、価格をもつ」という言葉の意味をどうやら考えることができるようになったと思っている次第です。

(ロ)価値規定

商品について、まず肝心の価値の実体と価値そのものとが解明されえたとすれば、つぎにとりあげられるのは、当然、価値の大きさの規定の問題ということです。しかし、この問題は、すでに価値の実体が解明されているのですから、簡単に、「価値を形成する実体」、つまり、抽象的人間的労働の量によってきまる、という解答が出てきます。労働の量そのものは、また労働の継続時間によって計られるので、右の答えは、また、その生産に支出された人間的労働の労働時間数によって商品の価値の大きさは規定される、というように言いあらわすこともできます。

しかし、同じ商品についてみても、その生産に支出された各生産者の労働時間数はけっして等しいものではないの

で、その生産に社会的に必要な労働時間、つまり、社会的にみて平均的な労働時間がその価値の大きさをきめるものとならなければならない、――多くの人は、マルクスが、右の価値の大きさを規定するものとして用いている「社会的必要労働時間」という言葉をこのように解釈しています。日本での代表的な「マルクス経済学者」といわれた先生も、つぎのように説いています。――「いま同じ種類の商品一単位を生産するのに、A、B、C、Dの各生産者が必要とする労働時間をそれぞれ、10時間、8時間、6時間、4時間であるとすれば、その商品の価値の大きさは、その平均的労働明間、つまり7労働時間である」と。

右の先生は、むかしアダム・スミスが商品の交換価値の大きさは、標準的な生産条件のもとで社会的に正常な働き方でその生産に要した労働の分量、つまり労働時間によってきまると述べていたことが、その念頭になかったもののようです。マルクスは、この先生のように早やのみこみで誤解におちいる向きが続出することを予想していたためでしょうか、右の「社会的に正常な働き方」という点をもっとずっと明確に、理路整然と説明しておいてから、「社会的必要労働時間」という言葉をかかげてきているのですが、右の先生については、残念ながら、やはり、「見れども見えず」という「諺」がぴったりのようです。

マルクスの用意周到な説明は、あらましつぎの通りなのです。

「もし労働時間数だけで価値の大きさがきまるというのであれば、怠惰か不熟練であればあるほど、それだけ時間が多くかかり、したがって価値もより大きくなる、というようなことになってしまうではないか。問題は、価値はみな等質のものであるからその価値をつくりだす労働も当然等質のものでなければならないのに、その労働を担う人間労働力そのものが、この社会の各成員についてみなその質を異にしており、したがってその労働も異質のものとなっ

ているという点にあるのだ。しかし、このいろいろに違った質の人間労働力が支出されつくりだされた生産物は商品として等質の価値をもつものとなっているということが肝心なところなのである。つまり、価値の実体は、人間労働力そのものではなくて、その労働力の流動である人間的労働であるから、労働力そのものは質が異なっていても、その労働力の流動において同じ質のものとして実現されれば、それは同じ質の人間的労働として価値の実体にりっぱになることができるのである。つまり、それらの異なった労働力はその力の発現において、『社会的に平均的な労働力という性格をもつもの』になればよいのであって、そのことは、『社会的平均的な労働力として作用する』こと、つまり、『一商品の生産においてただ平均的に必要な、または社会的に必要な労働時間だけでつくれる』ものだということで実証されうるし、またそれで実証されるかぎりで、価値の実体である社会的平均的な質の労働力として社会的に通用するものとなるのである。ところで、労働そのものの質は、労働の熟練と強度という二つの基準において計られるのであるから、右に述べた社会的に必要な労働時間というのは、『現存の社会的に正常（ノルマル）な生産条件と労働の熟練と強度の社会的な平均度』とをもってなんらかの使用価値を生産するために必要な労働時間ということになる。このさい、生産条件も労働の質と並んで、重要な要因となっていることをよく心得ておくべきである。これはのちの理論の展開にとって重要な意義をもっているものである。

要するに、社会的に必要な労働時間とは、労働力の発現である労働の質が等しいものでなければならないということの別様の表現でもあるし、また、同じ商品はつねに『平均見本』として、まったく同じ価値をもつものであるということをも示すものとなっているのである。だから、右のように、各生産者の生産する同じ種類の商品について、それらの『価値』が10時間、8時間、6時間、4時間というように違っているとするのは、そもそも私〔マルクス〕の言

っている『平均見本』という言葉の意味すらもわかっていないことを示しているものである[7]」と。

(7) 商品価値にあらわされる労働、つまり抽象的人間的労働については、マルクスが『資本論』の前著である『経済学批判』の中ではこれを「抽象的一般的労働」とか「一般的人間的労働」と呼んでいます。この「一般的」という規定の意味を正しくとらえれば、さきの「算術平均」の得意な先生のようなずさんな解釈は生まれなかったことと思われます。

なお、右のようにして確立された価値規定にもとづいて、ここからただちに、

「ある商品の生産に必要な労働時間が不変であるならばその商品の価値の大きさも不変であるが、しかし、この労働時間は、労働の生産力に変動があればそのつど変動する」(前出、第二三巻、五四ページ)

と述べて、マルクスは、「労働の生産力が多様な事情によって規定されている」が、なかでもとくに、つぎののによって規定されているとして、つぎの諸要因をあげています。

「労働者の熟練の平均度、科学とその技術的応用可能性との発展段階、生産過程の社会的結合、生産手段の規模と作用能力、さらにまた自然諸関係」(前出、五四ページ)。

これらの諸要因は、価値生産、つまり商品生産の必然的発展と結びついたものであると同時に、発達した商品生産"資本主義的商品生産の発展を直接に規定したものでもあり、その意味できわめて重要な意義をもっているものです。マルクスが『資本論』第一巻第一章第一節において明確に価値規定をうちだしているのは、価値についてのいわば「質的規定」としての「価値の実体」にたいする「価値の量的規定」としての価値規定を、つまり価値についてまずその基本的な「質」と「量」の規定を明らかにするためのものであって、それは、理論体系の端緒における当然の課題といわなければなりませんが、しかし、この価値規定は、右にあげられたような、商品生産、とくに資本主義的

生産の発展過程において決定的な役割をはたすことになる諸要因が、どういう意味において、どのようにはたらくものであるかということをその十分な広がりと深さにおいてとらえるための、いわばもっとも基本的な「法則」または基本的「傾向」を示したものだという点も、――理論の展開のなかで――はっきりと把握することが肝要であると、私は考えるものです。しかし、紙幅を考慮して、この点についてのたちいった論究は、いずれ近く発表する予定の別稿にゆずることにしたいと思います。

(ハ)価値の人間支配

後段の「(6)　価値の結晶としての貨幣の全能」においてとりあげられているように、「貨幣の全能」、つまり「貨幣の人間支配」は、どんな人間でも、およそ資本主義社会で生活している者であれば、身にしみてはっきりと認識しています。だが、なぜ、貨幣という死んだ物が生きている万物の霊長である人間さまを支配し翻弄してやまない「全能」者になっているのかということを真剣に追究しようと志す人は数えるほどしかなく、また、「近代理論経済学」などというしゃれた名前の御用学問も、もちろん、そんなことにはおかまいなしというところです。この点は、いずれ(6)でとりあげられるはずですが、ここで、私は、「貨幣の人間支配」は、貨幣商品が出てきてはじめて生じた貨幣特有のものではないということ、つまり、それは、そもそも、「価値の人間支配」が基本にあって、その「価値の人間支配」が発展して「貨幣の人間支配」という、明瞭な形をとって現われることになったものにすぎないということを強調しておきたいと考えます。

この「価値の人間支配」という、価値概念のうちできわだって重要な側面は、いうまでもなく、マルクスによってはじめて究明され、その科学的な理論体系の中で端緒を成す「商品の法則」の解明において、「商品の物神的性格」

という言葉をもって示されているところです。この側面の明確な把握が科学的な経済理論体系の精確な理解にとってどんなに決定的に重要かということは、マルクスが『資本論』第一巻第一章「商品」の最後を飾る第四節をばことさらに「商品の物神的性格とその秘密」と題し、かなり多くの紙幅を割いて詳細な論究を展開しているばかりでなく、しかもこの「物神的性格」の決定的意義を明確にするために資本主義社会以外の歴史的な諸社会のあり方の的確な特徴づけまでをも与えているということによって、疑う余地なく明示されている、と言うことができます。

ここでは、その第四節の内容がどうなっているかを説明することが課題となっているわけではありませんが、私の言うところの価値の人間支配ということの内容をのみこんでいただく便宜を考えて、「商品の物神的性格」ということをマルクスがどのように説明しているかということを、ごく簡単に紹介しておきたいと思います。

マルクスは、まず、商品について、それが使用価値である面についてはすべて明確で問題はないが、それが商品として、つまり「価値物」として出てくると、その価値の面はまったくとらえようもなく、かえってそれによって人間が飜弄されるという事実をとりあげて、そのような商品の「神秘的な性格」、「謎のような性格」は、いったい、どこから生ずるかという問題を提起して、それは、商品の使用価値からも、また、人間がそれをつくるためにその人間労働力を何時間か流動させたということ（①）、ある一定量の人間的労働によってつくりだしたということ（②）からも生じたものではないし、また生産者が他人のため、社会のために労働したということ（③）、つまり彼の労働が社会的な労働であるということからも生じるわけはないと答えます。そして、結局、答えは、労働生産物が商品という形態をとるところから生ずるものだということになって、その意味内容をつぎのように説明することになっています（つぎの私の拙い解説の中に出てくる①、②および③は、つい先きに述べた三つの事柄をそれぞれ指しているものです）。

つまり、それは、

「まず商品生産者が同等な人間的労働をしたということ（①）は、必ず労働生産物が人間にたいして価値物として対立するものになることにより、生産者が何時間かの人間的労働をしたということ（②）は、必ず労働生産物がある一定の大きさの価値をもつということになり、そして最後に、各生産者が、社会的な労働をしたということ（③）が、必ず労働生産物どうしが社会的関係を結ぶということになる」ためとされています。これは、マルクスの文章をただそのまま平易に言い直しただけのものですが、これでは人間を支配する「物神性」のほどが明確に印象づけられない恐れがありますので、私は、同じ内容をつぎのように説明することにしています。

「生産者が他の生産者とまったく同じ人間的労働をしたからといってそれではだめである。その労働によってその労働生産物そのものが人間にたいして価値として対立するものになったときに、はじめてそれによってその生産者が他と同じ人間的労働をしたことになるのである。生産者が何時間か人間的労働をしたといっても問題にはならない。彼の労働生産物が、どれだけかの大きさの価値をもつものとなったときに、それではじめて彼はある一定時間人間的労働をしたものと認められるのである。生産者が他人のため、社会のために必要な労働をしたとしても、それではなんにもならない。彼の生産物そのものが他人の生産物と交換という社会的関係を結んだときに、それによってはじめて、彼は社会的労働をしたものと認められるのである」と。

要するに、人間がその労働力を支出し労苦してつくりだした労働生産物そのものが、当の生産者とは無関係なものとして、それ自身独自にある大きさの価値＝社会的な力をもつものになり、その価値に応じて労働生産物どうしが、生産者とは無関係に、交換という関係を結ぶものとなったときに、それによってはじめて、その生産者は一定分量の

人間的労働を、しかも社会的労働の一分子を担うものとして、遂行したことが認められることになるのですから、生産者である人間は、その労働によってつくりだした生産物＝商品そのものによって、文字どおりその死命を制せられるものにいやおうなしにならざるをえないことになっているのです。右の三つの事柄は、すべて労働生産物が商品に成らざるをえないことから生まれるものでありますし、またそれは、商品と成ることそのことの意味内容をあらわしたものですから、正確には、「商品の物神的性格」と言われるわけです。しかし、この「商品の物神的性格」の内容をみますと、右の三つのいずれも、労働生産物が価値をもつものとして、人間に対立して独立することをあらわしたものですので、私は、やはりこれは価値の重要な特質を示したものとして、価値概念の中にふくませて、というよりもその重要な骨格の一つを成すものとして、とらえることが肝要と考えたわけです。また、このようにして「価値の人間支配」の根拠を厳密にとらえておくことが、後段において、「貨幣の全能」の意味内容を十分正確に理解することを可能とも必然ともするのではないかという「見通し」が、このことを裏付けてくれているようにも考えるものです。

なお、この小論の「(4)　商品の法則――労働の物化と自立化」と「(5)　価値概念の骨格」の各小節で明らかにしてきましたことについて、とくに私が力点をおいて説明している論点に注意していただく便宜を考えて、つぎの二つのことを補足しておきたいと思います。

その一つは、商品の法則が人間の意志のいかんにかかわらず、鉄の必然性をもって貫徹する社会、労働生産物が価値をもち、「価値の人間支配」が自然法則としてつらぬかれる社会は、長い人間社会の歴史的発展過程のなかで、ただひとつ、生産手段の私的所有にもとづく社会だけである、ということです。このことは、さきに引用しました『資本論』第一巻第一章第四節「商品の物神的性格とその秘密」の中に詳細かつ正確に究明されていますし、同じ第一章

第二節「商品に表わされる労働の二重性」のなかに明記されているつぎの命題、つまり、

「ただ、独立に行なわれていて互いに依存し合っていない私的労働の生産物だけが、互いに商品として相対するのである」（前出、第二三巻、五七ページ、傍点―山本）

によっても疑う余地はありません。ですから、私的所有を完全に廃棄した生産手段の社会的所有または共同的所有に基づく社会主義社会においては、商品は影も形もなく、価値などというものは薬にしたくとも見つからないというのは理の当然ですし、マルクスも社会主義社会の本質的特徴について精確な解明をあたえているきわめて重要な労作、『ゴータ綱領批判』のなかで、この上なく懇切かつ明確に、

「生産手段の共有を土台とする協同組合的社会の内部では、生産者はその**生産物を交換しない**。同様にここでは、生産物に支出された労働がその生産物の**価値**として、すなわちその生産物にそなわった物的特性として現われることもない。なぜなら、いまでは資本主義社会とは違って、個々の労働は、もはや間接にではなく直接に総労働の構成部分として存在しているからである」（マルクス＝エンゲルス全集、第一九巻、邦訳大月版、一九ページ、傍点―マルクス、ゴシック体―山本）

と教示しているのです。

ところが、レーニンの不肖の後継者である大元帥スターリンは、その有名な『ソ連邦における社会主義の経済的諸問題』（一九五二年）のなかで、「社会主義社会にも商品があり、価値があるのは当然である。われわれは価値法則を利用すべきである」などといった、驚くべき主張を公然とかかげており、また今日「社会主義国」と自称している国々の多くにおける「マルクス主義的」経済学者たちは、そろってこのスターリンの妄言をうのみにして、同じことを

声を大にして唱えている有様です。スターリンをはじめ、その尻尾についているエピゴーネンたちは、マルクスの明示しているところと全く正反対の「理論」を公然と唱えながら、なおかつ、自分たち自身がマルクス主義理論を忠実に守っているとか、自分たちの国はりっぱな社会主義国であるとか、くりかえし宣伝しています。かつてレーニンは、マルクス主義の革命的原則を改ざんしたカウツキーに「背教者」という適切な烙印を押したものですが、それに比べてはるかに低劣で露骨な改ざんを公然と「マルクス主義」の名をつかって押し通している連中は、なんと評したらよいでしょうか？　今日、「社会主義」を名乗る「先進的」諸国が、その生産力発展の水準においても、国民の精神的文化的発展の程度においても先進的資本主義諸国のはるか後塵を拝するという有様で、むしろ資本主義へ転落しそうな、後退的傾向さえ指摘されるほどであるとすれば、それは、右のような反マルクス主義的理論の猖獗という現象と密接なかかわりがあるとも考えられるのですが、読者諸君はどのように判断されるでしょうか？

いまひとつは、「労働の疎外」という言葉が、この場合――さきに述べた(4)と(5)との内容にかんして――あてはまるものかどうかという問題です。この言葉は、『資本論』の中でこそ強調されてはいませんが、マルクスのうちたてた科学的な経済理論のもっとも重要な特徴のひとつを示すものとして、大方の先生方によって強調されているものです。私が、さきの(4)において、「労働の物化と自立化」という言葉をかかげましたし、また、(4)の(ハ)ではことさら「価値の人間支配」という特徴を強調していますので、それらはすでに右の「労働の疎外」ということをあらわしたものではないかという推測も、あるいは生まれえたのではないかと思われます。私自身も、かつて、私的生産者の抽象的人間的労働が労働生産物に対象化して商品価値として自立化し、人間自身を支配するものとなることについて、それは「労働の疎外」そのものではないが、それのいわば「端緒形態」といえるものだと説明したことがあります。し

かし、よく考えてみますと、「端緒形態」というのは曖昧・不正確で、厳密にいえば間違いであったと反省しています。その理由は、簡単です。「労働の物化と自立化」にしても「価値の人間支配」にしても、私的生産者の労働が、彼自身の意図にしたがって意識的に行われていること、つまり、労働そのものはまだ生産者自身の主体的な意識的活動であることに変わりはないからです。「労働の疎外 Entfremdung」とは、その労働力の流動そのものが労働力の担い手自身にとって「よそよそしいもの」、「無縁のもの」、「手の届かないもの」（これらはすべて、ドイツ語の fremd という形容詞で表わされます）になるということで、それは、労働力の担い手が賃銀労働者として資本家に雇われて資本家の指図通りに部分的作業をする部分労働者に、または部分機械に仕える生きた付属物として労働力を流動させなければならないときに、はじめてぴったりあてはまるものになるのです。この小論のこれまでの叙述段階では、さきによく説明されましたように、まだ資本主義的商品生産はとりあげられてはいませんし、その一般的基礎としての単純な商品生産、つまり資本主義的という規定を捨象したたんなる、または本来的な、私的所有一般という生産関係のもとでの法則を考究している段階ですので、当然のことながら、「労働の疎外」ということは問題としてとりあげられえないわけです。この考究段階に在るのは、言ってみれば、労働そのものではなくて、労働が労働生産物に対象化したもの、つまり物化した労働が、労働力の担い手である私的生産者にたいして「無縁のもの」となって対立する、ということなのです。

（未完）

（一九八六・一一・二三）